

『マクベス』と予言の自己成就

大杉 至*

【要旨】 『マクベス』はシェイクスピアの悲劇の一つであり、魔女の予言とその後のマクベスの行為との関係がこの悲劇を解釈する上でのポイントである。そこではマクベスの一連の行為を「運命」ととらえる見方と、そうではなくてマクベスの内的願望・感情が発現したものであるとする見方がある。本稿では、「予言の自己成就」という社会学的視点から、予言の影響下でマクベスがどのような状況の定義の下で行為を行ったのかという点を中心に検討した。

【キーワード】 予言の自己成就 運命 自由意志

はじめに

周知のように『マクベス』はシェイクスピア (William Shakespeare 1564 - 1616) による四大悲劇の一つであり、1606 頃年に書かれたと考えられている。シェイクスピアは古今東西を通じてもっとも著名な劇作家であるので、彼が活躍した時期から 400 年ほど経過した現在までに、その作品に関して夥しい数の批評・論評が行われてきたことはいうまでもない。英文学を専門としているわけではなく、ましてやシェイクスピアを専門的に研究しているわけでもない筆者がそれらを綿密にフォローしたうえで、新たな文学的「マクベス論」を展開することは不可能である。したがって、この著名な作品を別の視点から、すなわち社会学の重要な概念である「予言の自己成就 (self-fulfilling prophecy)」の視点から解釈しようとする試みが本論文の目的である。

I 『マクベス』の概要と特徴的表現法

まず、主な登場人物を紹介しておこう。

ダンカン	スコットランドの王、マクベスに殺害される
マルカム	その息子 (ダンカンにはドナルベインというもう一人の息子がいる)
マクベス	武将、後にスコットランドの王
バンクォー	武将、マクベスの刺客によって殺害される

平成 21 年 11 月 2 日受理

*おおすぎ・いたる 大分大学教育福祉科学部社会学教室

マクダフ スコットランドの貴族
 マクベス夫人
 魔女たち
 フリーアンス バンクォーの息子

他にも登場人物はいるのだが、ここでは以上で十分であろう。なぜなら、『マクベス』ではマクベスとマクベス夫人が中心的人物であり、この二人を「厚い浮彫にするため、シェイクスピアは他の脇役を薄く彫っている」（福田：「解題」179頁）と言えるからである。

次に劇のあらすじを紹介する。

スコットランドの武将であるマクベスとバンクォーは叛乱軍を打ち破った帰路、荒野で三人の魔女と出会う。魔女たちはマクベスがやがては王になり、バンクォーについては、その子孫が王となると告げる。

その夜、スコットランドの王、ダンカンがマクベスの城に泊まりに来ることになり、夫人に叱咤激励されてマクベスは眠っている王を殺害し、新たな王となった。

しかし、そのことの後悔と恐怖がマクベスを苦しめることになるが、後に引けない彼は秘密を知っているバンクォーを殺害させる。亡霊の姿で宴会の席に現れたバンクォーに、マクベスの不安と恐怖はさらに募る。

憔悴し混乱を極めるマクベスは、予言を求めて再び魔女たちに会いに行く。そこで「女から生まれた男はマクベスには歯が立たない」と「バーナムの森が、城のあるダンシネインの丘へ攻めてくるまではマクベスは決して負けない」という予言を得る。

マクベスの恐怖政治によって、人心は離れ国内は荒廃する。マクダフをはじめとする心ある貴族たちや武将たちは、イングランドに逃亡したマルカムと彼を支援するイングランド軍の側について、マクベスを討とうとする。一方、王殺害の心の傷からマクベス夫人は夢遊病となり、ついには自殺してしまう。

反マクベスの軍が迫るなか、マクベスは新たに得た二つの予言を頼りに城に立てこもるが、バーナムの森が攻めて来（実は敵軍が木の枝でカムフラージュして城に迫ったもの）、マクダフが女から生まれたのではない（帝王切開で生まれた）ことが分かり、彼に殺されることとなる。

予言の自己成就的視点によってマクベスの行動を解釈していく前に、シェイクスピアによる『マクベス』表現方法の特徴をいくつか指摘しておきたい。それらが、『マクベス』の世界と密接不可分であり、独特の雰囲気を作り出していると言えるからである。

『マクベス』における表現方法の特徴として、矛盾的表现、対照的表现をあげよう。

1 矛盾的表现と曖昧な世界

雷と稲妻のなか魔女が三人登場し、掛け合いをするところから劇は始まるが、今度はいつまた三人で会おうかという問いに、その一人が、

戦いが負けて勝ったとき¹⁾ When the battle's lost and won²⁾.

と述べる。われわれの世界では正反対である「負ける」と「勝つ」を平気で‘and’で結んでいることに読者（観客）は違和感を覚える。さらにそのすぐ後、三人で呪文のように、

きれいは穢い、穢いはきれい Fair is foul, and foul is fair.

と唱えた後、「霧のなか、汚れた空をかいくぐり」消えていく。ここまでくると、というよりも劇の開始後すぐに観客はこのような矛盾的表现が意識的に使われていることに気づく。そして、I - 3³⁾で登場するマクベスの最初の台詞が、

こんな穢くて、きれいな日もない So foul and fair a day I have not seen.

であり、次に集まるときには荒地地でマクベスに会おうと言ったI - 1での魔女達の台詞通り、そこには魔女達が潜んでおり、マクベスが魔女の世界と何らかの関係の状態に置かれていることが示唆されている⁴⁾。

以上見てきたように、二律背反ともいうべき矛盾を含む表現は魔女の世界と関係している。この矛盾がさらに混沌としたものが、先ほどの「霧」「汚れた空」となる。実際、魔女自身が「この世のものとは思われぬ」姿形をしており、女でありながら髭が生えている。

ここから『マクベス』の魔女の本質は両義性であり、この世と悪魔の世界を媒介するトリックスターであることが分かる。魔女の予言の重要部分はすべて両義性を有しており、これに翻弄されながらマクベス（とその夫人）は破滅の道へと導かれていくのである。同時に、‘foul and fair’のような表現は共時的には矛盾を内包しているが、通時的に見ると「人間万事塞翁が馬」のような、現在よいと思われたことがそれを裏切ったり、またその逆もありうるといった、時間的な両義性でもあり、『マクベス』のプロットは実際にそのように展開していくのである⁵⁾。

2 対立的表現と対立する世界

『マクベス』では二つの世界が前提されており、それを富原にしたがって「正しい秩序の世界」と「反秩序の世界」としよう（富原：63頁）。それぞれをIV - 3に出てくるマルカムの台詞（木下訳）で表現すると、前者は〈公正、真実、節制、節操、寛容、忍耐、慈悲、謙譲、敬虔、抑制、勇気、忍耐〉といった美德からなり、後者は〈残忍、好色、貪婪、陰険、不実、無謀、奸悪〉といった「罪と名のつくあらゆる臭いにまみれた」世界である。魔女はこの二つの世界を媒介するという意味で両義的な存在であった。

『マクベス』の基本的な構造は「正しい秩序の覆滅とその回復」（富原：53頁）とする解釈が可能であるように、この二つの世界が基本的な対立をなし、それは「光と闇」、「天と地」といった対立としても表現されている。王のダンカンやその息子のマルカム、彼を支えるマクダフたちが「正しい秩序」の側にあり、魔女の予言を聞いた後のマクベスとその夫人が「反秩序」を代表する⁶⁾。もっとも、『マクベス』は、主人公が「正しい秩序」から「反秩序」へと移行していく悲劇であるから、全体としては「反秩序」の世界が中心的に演じられるわけであ

る。

以上を「縦の対立⁷⁾」とするならば、主人公であるマクベスとその夫人は「横の対立」を形づくっている。それらを数え上げてみよう。

まず、マクベスは男（夫）で夫人は女（妻）であるということは、当然ではあるが根源的な対立をなす。二人が王を殺害することを決めた後でも、マクベスはそれたことをする恐怖から実行を躊躇する。それに対して夫人は夫を次のように評価している。

あなたのお気質が心配です。事を手っとり早く運ぶには、人情という甘い乳がありすぎる、なるほど大望はおもちでしょう、野心もないではない、でも、それを操る邪な心に欠けておいでだ（I - 5）

マクベス夫人はあくまで非情に徹して計画を練り、夫を叱咤激励して王殺害を実行せしめる存在である。そして、王殺害後でも、恐怖に狼狽するマクベスに対して、夫人は冷静非情に後始末を行い、夫の不手際を補う⁸⁾。

次に、有名な部分であるが、マクベスは王殺害直後、血に染まった自分の手を見て、

すべての大海の水ならば、この手の血をきれいに洗い流してくれるだろうか？いや、だめだ、むしろこの手の方が海の水を深紅に染め、緑の大海原もたちまち朱と染ろう（II - 2）

と狼狽し動揺する。これを見て夫人は、「ちよっとの水できれいに消えてしまう。訳もないこと！」とたしなめる。ここも対比的な表現であるが、さらに、その後夢遊状態になったマクベス夫人が、自分の手から血の染みと臭いが取れないという妄想のなかで、

まだここに血の臭いが。アラビアの香料をみんな振りかけても、この小さな手を甘い香りにはすることは出来はしない。ああ！ああ！ああ！（V - 2）

と嘆くとき、その対比は明瞭である。

さらに、マクベス夫人の夢遊病は、王殺害直後から続くマクベスの状態との対比である。すなわち、就寝中の王を殺害した直後、「もう眠りはないぞ！マクベスが眠りを殺してしまった」という声を聞いた気がしたマクベスはそれ以降安眠することを許されず、恐怖と焦燥感のなかで暴君への道をたどり、最後にはマクダフに殺されることになる。

一方でマクベス夫人は、日常的な夢遊状態、すなわち夢（眠り）が覚醒状態を支配している状態である。これは覚醒状態が眠りを支配してしまったマクベスと対照的である。また、殺害されることによって最期を遂げたマクベスと対照的に、夫人は自殺によって命を絶つこととなる⁹⁾。

以上検討してきたように、『マクベス』の世界には、曖昧模糊とした矛盾の世界および矛盾の要素が自立化した対立の世界（縦と横の対立）が綾のように織り込まれており、このことがわれわれを異次元へ誘うような独特の雰囲気醸し出している。

II 予言の自己成就の視点から

1 運命と自由意志

シェイクスピアの批評家として著名な A. C. ブラッドリーは、その「マクベス論」において、魔女たちの予言と破滅に至るマクベスの行動との関係のとらえ方に、以下の二つがあることを示している。すなわち、それを彼の抗しえない「運命」とするのとらえ方と、魔女とその予言とは「マクベスの胸に之まで眠っていた思惑と欲求とが今意識にのぼってきて正面に出てきた象徴的な表現にすぎ」（ブラッドリー：363 頁）ないとするのとらえ方がそれである。後者を徹底すれば、すべてはマクベスの自己責任であるということになり、それを自由意志論としておく。ブラッドリー自身は純粹な自由意志論とはいえないが、どちらかといえばその立場から論を展開している。

運命論を退ける根拠として、ブラッドリーはまず、魔女たちは「俗悪な意地悪の老婆ども」に過ぎず、運命を司る神といった超自然的な存在ではないことをあげている。また、魔女の予言には王殺害のことは一言も含まれておらず、これはマクベスが（場合によったら以前から）自分で考え出したことであることを重視している。すなわち、「マクベスに対するウィッチどもの予言の影響ははなはだ大きいけれども、影響以上の何物でもなかった事は極めて明らかである」（ブラッドリー：359 頁）というのとらえ方である。

ブラッドリーの考察を受けて福田恆存は、運命と自由（意志）との関係の考察をさらに進めようとする。福田は、個性の発現としての「宿命」と外部的な事件の連鎖としての「運命」を区別し、王になるには血統としても精神的資質としても欠けている自己の宿命を補うために、マクベスは運命（魔女の予言）の力を借りるしかなかったとするのである。人間としての力のないマクベスは、悪事ではあるが自分にとっての重大事を行う場合に、それが絶対不可避の逃れられないことだという自己催眠を必要としたというのである。こうして福田は、「血統の純粹と精神の高貴との憧憬と復讐の物語」（福田：154 頁）として『マクベス』を位置づけている。

2 予言の自己成就

以下では「自己成就的予言」という、すでに社会学の古典的概念と言ってよい視点から『マクベス』を解釈してみたい。まず、この概念を世に知らしめた R. K. マートンにしたがって整理してみよう。

マートンによれば、自己成就的予言とは「最初の誤った状況の規定が新しい行動を呼び起こし、その行動が当初の誤った考えを^{リアル}なものとすること」である（マートン：384 - 385 頁）。マートンは以上のように規定しているが、過不足のない定義の形ではないと思われるので、彼の説明を援用しながら補っておこう。そのためにも、マートンのあげている例を紹介してみよう。

例：1930 年代はじめ、ある銀行は健全な経営状態であったが、預金の支払い不能の噂が立ち、相当数の預金者がそれをまことだと信じるようになり、自分の預金を引き出しておこうとする長蛇の列は日に日に長くなり、実際に支払い不能に陥った。

アメリカの大恐慌の出発点として、われわれもよく知っているタイプの例である。いくつかの構成要素に分けてみよう。

まず、最初に状況規定の変更がある。この場合では、前提として「銀行から必要な金額をいつでも引き出すことができる」という預金者の状況規定が存在する。あるいは、われわれの多くがそうであるように、むしろ無意識的にそのことが自明であると考えられている。しかし、「予言」の出現により、「預金引き出せなくなるかもしれない」という新たな状況規定が発生する。それに基づいて、行為者の新たな行為が引き起こされるのである。しかも、マートンによれば、それ（預金の支払い不能）は「誤った状況の規定」でなければならない。しかし、ある新しい状況規定が誤っているか正しいかの判断は困難な場合もあるであろう。社会的な実験が困難である以上、判断が難しい場合の方がむしろ多いであろう。したがって、その判断はある程度蓋然性、あるいは主観的判断に頼るほかはないであろう。

マートンの例でいえば、「銀行が支払い不能に陥る」という噂（予言）がもしも真実だったと仮定してみよう。その場合には、その状況規定によって人びとが預金を引き出そうと銀行に殺到することによって、支払い不能の時期が多少早まるにすぎない。したがって、予言があろうがなかろうが結果は同じということになり、それに対して「自己成就的予言」と命名することはできなくなる。したがって、マートンは「最初の誤った状況の規定」を出発点にしたものと思われる。しかし、この概念をもっと広い社会的文脈で使用できるように、本稿では「誤った」という部分を保留しておきたい。

次に、この新たな状況規定が「その状況の構成部分となり、かくしてその後における状況の発展に影響を与える」（マートン：384 頁）ことになる。マートンの例でいうと、銀行の支払い能力が不能になるという予言に恐れを抱く人が一定数存在するであろうという新たな状況の定義を生み出し、そのことが、今のうちに自分の預金を引き出しておかなければ出せなくなるかもしれないという判断を生み出し、かくして多数の人が預金を引き出すことにより、銀行の手持ちの資金が底を突き、実際に支払い不能に陥る、という状況の発展である。

予言の自己成就にはこれ以外にもいくつかのタイプを想定しようと思われる¹⁰⁾が、まずは銀行の例を念頭に置いて『マクベス』の世界に戻ろう。

Ⅲ 最初の予言

最初の予言がなされる場面を振り返ってみよう。叛乱軍を打ち破った功労者であるマクベスとバンクォーが荒野を通りかかると、三人の魔女が現れてマクベスに向かって次のように言う。

魔女1 ようこそ、マクベス！ グラームズの領主殿！

魔女2 ようこそ、マクベス！ コードーの領主殿！

魔女3 ようこそ、マクベス！ やがては王になるお人！（I - 3）

グラームズ、コードーとは領地名であり、その時点でマクベスは既にグラームズの領主である。したがって、魔女1の言葉は単なる事実を述べたものである。また、その時点ではマクベ

スはコード一の領主ではないし、ましてや王でもない。この言葉にマクベスはすっかり驚き呆然とする。心が乱されたのである。

銀行の例に戻ってみよう。状況と全く無関係に思える予言（例えば好景気下で、その銀行の業績も申し分のない場合での支払い不能の予言）は、そもそも発生しがたいであろうし、もし予言がなされたとしても多くの人は無視するであろう。嘘の予言であったとしても、人びとがそれに反応して新たな状況を作り出すのは、「ありそうなことだ」といった漠然と抱いている感情と触れ合うからである。同様に、予言を聞いて呆然とするマクベスの心のどこかに、王冠を我がものにしたい、という野望が意識的にか無意識的にか存在したことは間違いないと思われる。つまり、銀行の例の場合は漠然とした不安が明確化されることによる「状況の定義の変更」であり、マクベスの場合は漠然とした願望が明確化されることによるそれである。漠然とした願望（または不安）から明確に意識にのぼった願望（または不安）という点を重視すれば、「状況の定義の変更」というよりも「状況の定義の明確化」といった方がふさわしいかもしれない。しかし、それが新たな行動の引き金になりうるので、本論では「状況の定義の変更」面を重視することとする。

それに対してバンクォーは対照的に、自分は「ねだりも恐れもしない男」なので、よいものであろうと悪いものであろうとかまわらないからと言って、自分に関する予言を求める。その結果が、

魔女 1 マクベスよりは小さいが大きい

魔女 2 ふしあわせだが、ずっとしあわせ

魔女 3 子孫は王になる、お前はならんがのう（I - 3）

というものであり、言い終わると、魔女たちは姿を消してしまう。最初の二つの言葉は魔女特有の矛盾に満ちたものであり、最後のそれは明確な予言である。いずれにせよ、ここでマクベスとバンクォーはそれぞれに関する魔女たちの予言を共有したのである。

実は魔女の予言の前の場面（I - 2）で、王ダンカンが叛乱軍に手を貸した裏切り者だということが分かったコード一の領主には死刑を申し渡し、叛乱軍との戦いでもっとも勇敢に戦い手柄をあげたマクベスに新たな領主の地位を与えることを決定している。したがって、風を司るとされ、どこへでも出没するとされる魔女が、予言がなされた時点ではこのことを知っていた可能性は十分に考えられる。そうであるならば、マクベスに対する魔女 2 の予言は既に知っている事実を述べたに過ぎず、言葉の本来の意味での予言は魔女 3 の言葉（「マクベスはやがて王になる」）のみということになる。

さて、魔女たちの予言があった直後、王の使いがやってきて、王がマクベスをコード一の領主に任命したことを告げる。したがって、魔女たちにとっては既定の事実かもしれないが、魔女の言葉を聞いた後に王の決定を聞いたマクベス（とバンクォー）にとっては、魔女 2 の予言が目の前で実現したことになる。「マクベスはやがて王になる」という魔女 3 の予言がにわか
に現実味を帯びてくる。

「最初の（誤った）状況の規定が新しい行動を呼び起こし、その行動が当初の（誤った）考えを真実なものとすること」（括弧は引用者）がマートンによる自己成就的予言の定義であった。先ほども述べたように、誤っているかどうかは事前には決定しがたい面が多いので、「誤

った」に括弧をつけた。また、状況規定をリアルなものとするのは行動だけではないであろう。マクベスのケースのように、予言の一部が実現することも、それを含む全体の予言をよりリアルなものとして示す¹¹⁾。予言の自己成就が軌道に乗って走り始めたのである。

こここのところをより詳細に見ておこう。

まず、魔女の予言の眼目はいうまでもなくマクベスが王になるという部分である。そのことをリアルなものと思わせるために、魔女1（グラームズの領主）と魔女2（コードーの領主）の言葉がある。そして、すぐにマクベスがコードーの領主になったことが、次には王になるという予言をリアルなものたらしめている。

マクベスがコードーの領主に任命されたという知らせを聞いたとき、バンクォーは「何だと、魔性のものが真実を語るのか？」と驚愕し、マクベスは「二つは本当だった。王冠をテーマとする壮大な芝居には、もってこいの幕開きだ」と傍白している。「二つは本当だった」といっても、一つは誰でも知っている事実であるし、二番目のものは先ほど述べたように、魔女たちにとっては既に聞き及んだ事実の可能性がある。だが、マクベスにとっては、「予言」が二つもあたったという事実が重要なのである。いずれにせよ、特に二番目の予言があたったことがマクベスとバンクォーに大きな衝撃を与えて、第三の予言をリアルなものと感じさせているのである。

ただし、マクベスがコードーの領主に任命されたとの知らせを受けた後の、第三の予言に対する二人の反応は異なるものである。すなわち、バンクォーは「人を破滅の道に誘いこもうとして、地獄の手先どもがときには真実を語る、つまらぬことで誠実さをみせておいて、いちばん大事なところで裏切るという手だ」と傍白している。先ほど驚愕した予言の真実性に対して、予言を言ったのが魔女だという点に着目することによって、新たな解釈を行うことで状況を再解釈したのである。

一方、王になりたいという野望を無意識的にであれ抱いていたマクベスは、王就任の約束手形としてのみ第二の予言の実現をとらえている。これが第三の予言に対する彼の志向性を基礎づける。

二人の反応の違いは、先ほども述べたように、マクベスへの予言に対しては彼の心のなかに反応する部分が既に存在していたことが要因であろうし、バンクォーにとっては自分のことではないので距離を置いて考えることができたためであろう。一方バンクォーにとって自分に關する予言ではあっても、「(いつか) 子孫は王になる」と言われたところで、新たな行動のしようがなかった、つまり状況の再定義を行いがなかつたということであろう。もちろん、魔女たちのターゲットはマクベスであつたのであり、バンクォーに関しては強要されたから答えたまで、つまり付け足しではあつた。しかし、後に見るように、この「付け足し」に対してもマクベスは強く反応することになる。

話を戻すと、ここでのマクベスの心理は両義的である。つまり、王への就任の「成功を約束するような真実」で始まった以上、悪いことではなく、同時に、「人を殺す¹²⁾」という想像するだけで恐ろしい場面が心に浮かんでくる以上、よいことでもない。王への任命の知らせを受けた直後に「王殺し」を想像しているわけである。だが、ここではまだその決意には至っていない。

次に、魔女の予言が真実であるのならば、王殺しという「身の毛もよだつように恐ろしい」ことに手を染めなくてもマクベスは王になれるのではないか、ということが考えられる。実際

マクベスも、王殺しを想像した後で考え直している。

運が王にしてくれるのなら、何もしなくても、向こうから王冠をかぶせてくれるわ (I - 3)

もしもマクベスがこの方針に従い、その結果王の地位が彼に舞い込んできたとしたら、それは魔女の予言通りではあるが、予言の自己成就とはいえない。予言の自己成就であるためには、予言が実現すべく新たな行動を引き起こす必要があるからである。

その新たな行動を引き起こすような、新たな状況の変化が発生する。すなわち、貴族たちを集め、王が直々にマクベスとバンクォーの功績をねぎらう席で、王位継承者を長男であるマルカムに定め、カンパランド公の称号を与えることを公表したのである。この直後のマクベスの傍白は以下の通りである。

カンパランド公か！この一段、踏みすべらして倒れるか、それとも、うまく跳越すか、とにかく、おれの行く手に立ちはだかっている。ええい、星も光を消せ！この黒く深い野望を照してくれるな (I - 5)

一度は舞い込んでくる運に身をゆだねようかとも思った状況に変化が生じたのである。老人である王¹³⁾が死んだとしても、その次の王には自分ではなく、まだ若いマルカム王子がなること。事態を自分で切り開かなければ、魔女の予言は実現しないかもしれないと考えても不思議ではない。漠然とした王殺しの予感は、ここではじめて決意へと変化したのである。

ここから、自分の城に泊まりに来た王を殺害することになるのである。その過程では決意が萎えかけたりして、それを夫人が叱咤激励したりするのであるが、その経緯はマクベスと夫人の関係の分析には興味深いのが、本論の目的とは離れるので省略する。

ところで、『マクベス』の重大な出来事が王殺害であることは間違いないが、それ自体は魔女の予言とは無関係な事柄である。場面を戻してみよう。魔女たちが予言をした後、マクベスは彼女らに向かって何度もその詳細を語るよう命令している。おそらく、魔女たちはなぜ未来のことを予言できるのか¹⁴⁾、どのようにして自分が王になるのか、等が聞きたかったのであろう。しかし、そういった疑問に答えることなく、魔女たちは「大地の泡のように」消えてしまったのであった。

王が殺害された後、マルカム王子は身の危険を感じ、イングランドへと一旦逃亡する。そのことにより、彼は父親殺害の嫌疑をかけられる。その結果、王と血のつながりがあり、また王に信頼されていたマクベスが王位を継承することとなる。それによって魔女たちの予言は実現するのであるが、王の殺害自体はマクベス、そして夫人の考えであった。したがって、魔女の予言が生み出した新しい状況のなかで、その予言を実現すべく行われた行動の一部が王殺害であったと位置づけることができる。つまり、王殺害は予言の自己成就そのものではないが、その一部であり、それは、王になるにはその方法しかないと考えたマクベスたちの状況規定に起因するのである。

IV 二回目の予言

マクベスは王を殺害した後、スコットランドの新たな王となるが、安眠を奪われた異常な興奮状態が続き、誰も信用できない暴君となっていく。こうした事態はマクベスの想定していなかったことである。王になるという魔女の予言は確かに実現した。しかし、それが実現する以前に考えていた王であることのイメージとは異なる状態である。王にはなったけれども、不安のない状態での王でなければならないと考えたマクベスは、その不安の原因を取り除こうとする。つまり魔女の予言を共有しているがゆえに、殺害に気づいたであろうバンクォーを殺させるのである（息子のフリーアンスには逃げられる）。しかし、王就任を祝う宴会の席に遅れずに必ず参加せよとの王マクベスの命令通り、バンクォーは亡霊の姿で参加し、マクベスの狂乱状態は貴族たちの知るところとなる¹⁵⁾。

本論の課題はマクベスをめぐる予言とその影響下での彼の行為に関するものであるので、以下の点を指摘しなければならない。バンクォー殺害の目的は、魔女の予言（と王殺害の事実）を共有している者の抹殺であると同時に、バンクォーに関する魔女の予言通りに彼の子孫が王位に就くことを阻止せんと、彼の息子を抹殺することであった。ここで重要なことは、マクベスが魔女の予言を運命ととらえたとすると、彼が運命に挑戦することとなったことである¹⁶⁾。すなわち、魔女の予言が実現しないように、状況に働きかけたのである。

そうはさせぬぞ、運命め、さあ、姿を現せ、最後までおれと勝負しろ！（Ⅲ - 1）

さらに、命令に背いてその宴会を欠席したマクダフが、自分に反旗を翻したことを疑ったマクベスは、魔女たちのところに行って、今後の詳細を聞こうと決意する。自分が原因であるとはいえ、事が思うように運ばないことに苛立ったマクベスには、そうするしかなかったのである。

もっと聞きだしてやるのだ、今となっては、どうしても知りたい、それが最悪の手段であっても、最悪の結果であっても。わが身のためなら、大義も名分も知ったことか、血の流れにここまで踏みこんでしまった以上、今さら引返せるものではない、思い切って渡ってしまうのだ（Ⅲ - 4）

運命にも挑戦したマクベスに、もはや怖いものはない。魔女の予言に一喜一憂するものでもない。マクベスは方向を既に定めている。しかし、嘘ではなかった魔女の予言でこうした状況になった以上、魔女の予言を利用して道を進んでいこうとする。それが破滅への道であろうとも。

さて、地獄の入り口でマクベスは三人の魔女との再会を果たす。魔女の予言は実現したものの、事が思い通りに進んでいかないため、魔女たちに不信感を抱いているマクベスは、地獄の使者から直接予言を聞かせると命令し、それがかなう。それらは幻影としてマクベスの前に現れ、それぞれ以下の予言をする。

幻影1 気をつける、マクダフに

幻影2 血を流せ、大胆になれ、意志を堅く持て、多寡の知れた人間の力など鼻の先で笑ってやれ、マクベスを倒す者はいないのだから、女から生まれた者のなかには

幻影3 マクベスは滅びはしない、あのバーナムの大森林がダンシネインの丘に攻めて来ぬかぎり（IV - 1）

これらの予言を聞いてマクベスは多少安堵するが、最後にどうしても聞きたかったこと、すなわち、バンクォーの子孫が将来本当に王になるのかを尋ねる。その結果、王の姿をしたバンクォーの子孫たちの幻影が登場し、ここでも魔女の予言が実現することを悟る。マクベスは苛立ち、敵だらけとなった世界でその敵を殲滅しようと戦いを挑んでいく。頼りは先ほどの幻影たちの予言である。まず、マクベスによる王殺害を確信したマクダフの家へ刺客を差し向ける。そのときマクダフはマルカムを支えんと、彼のいるイングランドへ身を寄せていたので、マクダフの妻と子どもたちが殺害される。

亡命しているマルカムにスコットランド国内の様子を報告した貴族によると、

あれは母国とは言えない、まるで墓地だ。どこを見まわしても、笑えるものが何もない、あるのは溜息や呻き声、空をつんざく叫びだけ、……葬式の鐘が鳴っても、誰が死んだとたずねるものも、めったにいない。善良な人々の命は、その帽子にさした花より早く枯れしぼみ、病気でもないのに死んでゆく（IV - 3）

といった有様となっている。

われわれは最終場面に移ろう。ダンシネインにあるマクベスの城は敵に包囲されるが、マクベスは幻影の予言を頼りに、城が攻め落とされることはないと信じている。しかし、敵の兵士たちがカムフラージュのために切った枝に身を隠してバーナムの森から移動してきたとき、バーナムの森が攻めてきたという報告を受け、幻影3の予言が効力をなくしたことを知る。

この後剣を手に打って出た先でマクダフと対決することになり、そこでマクダフが月足らずで母親の腹を割かれて生まれてきたことを聞かされ、幻影2の予言も効力をなくしたことを知る。かくして、マクベスはマクダフに討ち取られ、スコットランドに再び秩序が訪れるのである。

本稿の課題との関連で、二回目の予言とマクベスの行動を振り返りたい。まず、幻影1の言葉は予言ではなく警告である。その後の二つの言葉は予言ではあるが、荒野での魔女たちの予言とは性質が異なる。すなわち、「女から生まれた者は誰もマクベスを倒せない¹⁷⁾」、「バーナムの森が攻めて来るまでは、マクベスは滅びない」はともに条件構造をもった予言である。女から生まれなかった者はいない、また、森が動くはずはないという常識によって、自分に破滅はないとマクベスは解釈したわけである。荒野での最初の予言で曖昧な部分を十分に聞くことのできなかつたマクベスは、ここでその反省を生かすことができず、またもや魔女たちの術策に弄ばれることになったのである¹⁸⁾。

マクダフに気をつけるという警告と、自分が滅びるはずがないという予言を契機にしてマクベスはマクダフを殺害すべく刺客を送ったのであり、さらに凶暴性がエスカレートしていき、その結果反旗を翻す貴族が続出して来るわけであるから、魔女たちにとっては予言の真の意味

が実現していく過程である。その意味では予言の自己成就であるといえよう。しかし、予言の真の意味に気がつかない間は、マクベスにとっては事態は異なるはずである。マクベスの変化を再度追ってみよう。

幻影たちの予言を聞いたマクベスは、それを頼りに強気になる。マルカムも恐れるに足りない息巻き、貴族たちが逃げ出してイングランド軍の側についても意に介さない。ただし、この国が病んでしまっていることは自覚している。

しかし、バーナムの森が迫ってくるとの報告を受けると、当然ながら大きく動揺する。

う、気を引き締めなければならぬ。あの鬼婆めの言った言葉の真実めかした曖昧さ、疑わしいぞ (V - 5)

『マクベス』を一貫して流れている特色、矛盾したものの対立と融合の最後の表れが幻影たちの予言である。「バーナムの森が動かなければマクベスは安泰である」は「もしバーナムの森が動けばマクベスの安泰は保証できない」という意味を含んでおり、幻影が嘘を言ったわけではない。マクベスの解釈は常識的ではあるが、一方的な解釈であったのだ。

ここでマクベスは、もし受けた報告通りバーナムの森が攻めてきたのなら、「逃げようと踏みとどまろうと、もうだめだ」と、自らの「運命」を悟っている。しかし、本当に森が動いているのかどうか、自ら確かめているわけではない。予言に影響されているマクベスは、その予言を疑わしいものだと再解釈し、報告の通り森が攻めてきたと解釈したのである。ここでマクベスは死を覚悟した。しかし、「せめて、鎧を着て死んでやるぞ」と、最後の抵抗を試みる。

その後マクダフとの一騎打ちになったとき、彼が帝王切開で生まれてきたことを知らされ、「その一言で勇気もくじけた！」と言いつつ、以下の言葉をはく。

あのかさまの鬼婆め、もう信用しないぞ、このおれを二重の意味の罠に掛け、約束は言葉どおりに守りながら、最後には、まんまと裏をかく (V - 8)

剣を棄てて生きてきたまま世間の見せ物にでもなれというマクダフの言葉に、楯を投げ捨てて「最後の運試し」と戦いを挑み、討ち果てることで生涯を終える¹⁹⁾。魔女や幻影の予言に翻弄され続けたマクベスは、最後の最後に予言から解放されたのである。楯を投げ捨てたことはその象徴である。ただし、最後のそれは本当の意味での自由意志による運試しではあった。

ここでマクベスの状況定義の視点から、第二の予言の後の推移を再度図式的にまとめておこう。まず、この予言によって「自分は大丈夫だ」と確信したマクベスは大胆になり、マクダフ殺害に刺客を送った。同時に、予言による自信から残酷性と凶暴性を強めていった。そのことが味方を減少させ、最後に予言の本当の意味、すなわち魔女たちの意図を知ることになったのである。一方のマクダフは妻子を殺されたことから、マクベスへの復讐の意志をより強化させる。このことによって、「予言」が成就することになった。二回目の予言は、マクベスにとっては『『隠された予言』の自己成就』だったのである。

おわりに

『マクベス』はもちろんフィクションである²⁰⁾。しかし、この悲劇はわれわれに運命とは何か、ということを考えさせてやまない。2009年のプロ野球ドラフト会議で、巨人軍への入団を希望して過去2回指名球団への入団を拒否してきた社会人選手を獲得して、巨人の原監督は「強く強く運命を感じる」とコメントしている（朝日新聞、2009年10月30日、朝刊）。今回この選手を1位指名した球団は巨人軍だけだったのである。仮に、複数の球団がこの選手を指名して、巨人が指名権を獲得できなかったとしたら、原監督はどんなコメントをいただけるか。「うーん、これも運命でしょう」などと言うのではなからうか。原監督のコメントを揶揄しているのではない。既に実現してしまった、個人に関するある重大な事象を振り返るとき、どのような結果でもわれわれは「運命」という言葉で説明する傾向があるといいたいだけである。結果論としての「運命」である。

他方、将来に向けての「運命」はどうだろうか。M.ウェーバーの資本主義成立論（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）のなかでは、神によって既に定められており、知ることのできない自らの運命（「予定」）の下でのプロテスタントたちの行為が分析されている。かれらは魂が救われているという確証を得ようと、自らの不安を打ち消すためにも神の栄光を実現すべく、現世に持続的に働きかけたとされる。この例からも分かるように、将来に向けての「運命」はわれわれの世俗での行為に実に大きな影響を及ぼしうるのである。

『マクベス』が書かれた17世紀初めは、ウェーバーの分析した事態がまさに進行している時代であり、また、ヨーロッパ各地では「魔女裁判」も行われており、その意味では『マクベス』は今日以上にリアリティーをもっていたはずである。しかし、今日でも、あるいはおそらく永遠に人間は「運命」という考え方から逃れられない存在であり、その意味では『マクベス』のもつリアリティーは永遠なのである。

註

- 1) 訳すにあたっては、福田と木下の翻訳を参照した。
- 2) 現代英語での文はグレイグ (W. J. Graig, M. A.) にしたがった。また、原文として、ファーネス Jr. (H. H. Furness Jr.) を参照した。なお、『マクベス』が書かれたのは日本でいえば江戸時代初期であり、当時の日本語文（古文）と現在のそれとは相当異なるが、イギリスでは既に近代英語であり、基本的に現在と同じ文法である（木下：『マクベス』を読む参照）。
- 3) 以下、ローマ数字で「幕」を、算用数字で「場」を表すこととする。例えば「I - 3」は「第一幕第三場」である。
- 4) また、何気ないある台詞が今後の展開を示唆しており、後にその台詞と同じような状況が意味を違えて登場する、すなわち、いわゆる「悲劇的アイロニー」が多用されていることもシェイクスピア悲劇の特徴の一つである。これによって、まさに戯曲（劇）全体が「予言的世界」のなかにあるような印象が与えられ、『マクベス』においてはとりわけ効果的である。
- 5) もう一つ表現上の特徴をあげれば、ウィルソン・ナイトが『マクベス』ほど疑問文の多い作品はないであろう（福田：190頁）と言うように、疑問文の多用である。特に、魔女が登場している場面と王暗殺に関係する場面に多く見られる。このことによって、さらに曖昧性、不安性という効果を生み出している。
- 6) ダンカンにはマクベスに信頼を寄せる高潔な王である。マクベスは有能な武将であり、「秩序」

の側にいると思われたが、魔女の予言に翻弄されて「反秩序」の側に移っていくのである。

- 7) この秩序観は中世スコラ哲学の宇宙観に基づいていることが知られている（富原：66 頁）。それによると、全宇宙は神を頂点とする秩序体系をなしており、天上に近いものほど聖なる性質を持っている。したがって、高く悠然と舞っている鷹を鼠しか捕らない梟が襲って殺したこと（Ⅱ - 4）が王暗殺の象徴となるのである。また、人間の世界も王を頂点とする秩序体系を形成しているとされる。
- 8) しかし、彼女は「反秩序」の世界に根ざしきることはできなかつた。それは、夫の王殺害を激励する立場に身を置こうと、

さあ、血みどろのたくらみごとに仕える悪霊達、私を女でなくしておくれ、頭のてっぺんから爪先まで、恐ろしい残酷さでいっぱいにしておくれ！（Ⅰ - 5）

と願望しているが、

あのときの寝顔が父に似てさえいなかったら、自分でやってしまったのだけれど（Ⅱ - 2）

と、自分で殺害できなかったことを後に振り返るように、最後の皮一枚のところ「反秩序」の世界から逃れている。この部分が彼女に心の病を引き起こし、自殺へと至るのである。

- 9) マクベス夫人の死が自殺であると明示されているわけではないが、最後の場面でマルカムが夫人が自ら命を絶ったと伝え聞いていること、夢遊状態のときに医者が侍女に、危険なものはそばに置かず絶えず監視するよう注意していることから、自殺であると考えられる。
- 10) 「自己成就的予言」の反対物は「自己破滅的予言(self-destroying prophecy)」である。これは、「もし予言がなされなかつたとすればたどったであろうコースから人間行為を外れさせ、その結果予言の真実さが証明されなくなる場合」（マートン：385 頁）である。例えば、選挙で A 候補の当選が予想（予言）され、支持者が楽観視して選挙運動が鈍り、その結果 A 候補が落選したような場合が考えられる。このように、予言がなされたことがその後の事態の進展にどのような効果を及ぼすかには様々な場合があり、その要因として、誰が予言をしたか、その予言が本人にとって望ましいものか否か、その予言の正しさを補強するような材料があるか否か、等が考えられるが、詳細な検討は今後の課題である。また、文学作品はこのような事象の社会学的解明に有効な素材であると思われる。
- 11) 信用詐欺の場合は、小さなことで信用を積み重ね、最後に大きく欺く方法がしばしばとられることはよく知られていることである。
- 12) マクベスは歴戦の武将であるから、人を殺すこと自体に恐怖感を持っているわけではない。王を、しかも高潔な王を殺すことに恐怖感を持っているわけである。（註 7）参照
- 13) 「誰だって思いもよらないでしょうね、老人の体にあれほど血があるなどと？」（Ⅴ - 1）から、王ダンカンが老人であることが分かる。また、夢遊状態のマクベス夫人のこの台詞は、計画通りにあくまで冷徹に事を運んだけれど、計画にはなかつた彼女の動揺を表している。
- 14) 例えば、それが運命の神からの伝言であつたとしたら、事態の進行はずいぶん異なつたものとなつたであろう。もっとも、運命の神がその伝言を魔女に託すとも思えないが。
- 15) マクベスとその夫人、およびマクベスとバンクォーとの関係は、秘密の共有の可否と親密性との関係でマイクロ社会学的に分析することが可能であろう。「その内容のまったく特殊なもの、結合の関与者のみがたんにたがいに分有しあい、この共同関係の部外者であればだれも分有することのない特殊なものが、共同関係の中心」となる、すなわち親密さである（ジンメル：97 頁）。そこに秘密が入り込めば親密性はより増すであろうし、マクベスは夫人との親密性をバンクォーとのそれに優先させ、両立し得ないバンクォー（との親密性）を抹殺したのである。
- 16) 後述するように、最後の場面で本当の意味で「運試し」を行うが、ここでは魔女の予言に含

まれる運命の範囲内での「運命との対決」であることが重要である。その意味では、マクベスははまだ魔女の術中にある。

- 17) マクベスは最終的にはこの予言に騙されて最期を迎えることになる。このような「子ども騙し」の予言に翻弄されるとは、マクベスはよほど正常な判断ができなかったのであろう、とか、あるいはシェイクスピアのこの部分の構想自体に多少の無理があるのではないかと言いたそうな見解がありうる。この点をどう考えるべきであろうか。

この部分の英文は“none of woman born shall harm Macbeth”である。われわれには、帝王切開で生まれた者も「女から生まれた」のではないかと思われるが、英語では‘born’はもちろん‘bear（生む）’の過去分詞で受け身を表し、日本語の「生まれる」は受け身と同時に自発を表す。そして、われわれはどちらかというとも後者のイメージが強いので、多少の違和感が生じるのではないかと思われる。

また、マクダフは、自分は「裂かれた母の腹から月足らずでこの世に出た」とマクベスに語っている。明確には述べられていないが、当時のことでもあるし、死んだ母親の腹から取り出されたということも十分に考えられる。そうであるならば、男も女も超越した死体（＝モノ）から生まれてきたということになり、女から生まれた者ではないという正当な理由とみなすことができる。なお、この観点は本学部の金子光茂教授から示唆を得たものである。

実際、『ハムレット』のV-1で、誰が墓に埋められてるのか、男か女かと尋ねるハムレットに対して、墓堀人が「以前、女だったやつでさ。今は気の毒に、死人になっちゃった」（野島秀勝訳、岩波書店）と答え、死んだらもう男でも女でもないという考え方が示されている。これに対してハムレットは、「こいつ、なんて言葉にうるさいんだ！よほど気をつけて物を言わないといけな。どうともとれる曖昧なことを言えば、すぐ一本とられてしまう」と言っているのだから、死人＝モノという考え方が当時（も今も）一般的だったというわけでもないことが分かる。

また、黒澤明監督の映画『蜘蛛巣城』（1957 東宝、主演、三船敏郎）は『マクベス』のプロットを日本の戦国時代に適用したものである。そこでは、第二の予言では「女から生まれた…」という部分は削除され、「蜘蛛手の森が攻めてくるまでは…」という予言一つに設定されている。また、魔女の伝統のない日本であるから、「魔女」は「物の怪の妖婆」という設定になっているほか、いくつかの変更が行われている。

- 18) 論理的に見れば「女から生まれた者は誰もマクベスを倒せない」の「逆」の命題、すなわち「女から生まれなかった者はマクベスを倒せる」は必ずしも真ではない（「バーナムの森…」も同様）。しかし、マクベスは既に動揺しすぎて、論理的に予言を考えることはできなかったと思われる。
- 19) ここで、戯曲の最初の方の場面で、血まみれの士官が王ダンカンの陣営に帰ってきて、戦場でのマクベスの武勇を報告したことが思い起こされる。すなわち敵将マクドナルドとの一騎打ちで、敵を腹から顎へ刀で裂き、その首を城壁にさらしたという内容である。今、最後に近い場面でマクベスは、母親の腹を裂かれて生まれてきたマクダフによって、首を皆の前にさらされるのである。これも「悲劇的アイロニー」である。
- 20) 『マクベス』は基本的にはフィクションではあるが、歴史を素材にしていることも知られている。親戚であった王を殺し、1040年から1057年までスコットランドの王であったマクベスが後にマルカム三世に復讐されたことは確かであるが、マクベス自身の詳細はよく知られていないとのことである（福田：「解題」参照）。

また、最後の場面ではマクダフが新国王に決まり、一同が「スコットランド王、万歳！」と叫び、新たな秩序を形成したかに見える。しかし、アイアランドへ亡命したマクダフの弟、ドナルベインはそこにいないし、今後いつの日にかバンクオーの子孫が王位に就くことが予想される。その意味では、安定した、完全な秩序の回復とはいえない。

文献

- A.C.ブラッドリー 1958『沙翁の悲劇』(鷺山第三郎訳)内田老鶴圃刊行
福田恆存訳 1961『マクベス』新潮社(同書には、訳者の「マクベス」論を含む「解題」および海外の「マクベス」批評の抜粋が収められている)
- W. J. Graig, M.A.(ed.) 1905 *The Complete Works of William Shakespeare*, Offord University Press
- 木下順二訳 1997『マクベス』岩波書店(このなかに木下の解説である『マクベス』を読む)が収められている)
- R.K.マートン 1961『社会理論と社会構造』(森東吾, 他訳)みすず書房
- G.ジンメル 1994『社会学(上)』(居安正訳)白水社
- 富原芳彰 1962『シェイクスピア試論』研究社

Macbeth and Self-fulfilling Prophecy

OHSUGI, Itaru

Abstract

Macbeth is one of William Shakespeare's famous tragedies, the crucial point for which is concerning the relationship between witches' prophecies and Macbeth's actions. There have been two perspectives regarding Macbeth's actions : one sees them as his fate, and the other sees them as originated from his free will. In this essay, I tried to interpret *Macbeth* from the perspective of sociological concept, 'self-fulfilling prophecy'.

【Key words】 self-fulfilling prophecy, fate, free will